

ウラン濃縮原型プラントは、ウラン濃縮の商業化のために遠心分離機の量産技術の開発、商業化プラントに向けての機器・設備の大型化、合理化、信頼性、経済性の面からの最適なプラント建設・運転システムの確立等の研究開発を目的としたもので、昭和63年～平成13年まで連続運転を完遂し、約350t-Uの濃縮ウランを試験生産しました。

平成8年から回収ウラン(使用済燃料から再処理によって分離精製して回収したウラン)の再濃縮試験も行い、核燃料サイクルの輪を閉じることが出来ました。

技術開発の成果は、日本原燃(株)に技術移転しています。

(人数・件数は原子力機構全体で集計)

- 技術者の出向・派遣(移籍) 延べ 約90名(うち移籍者 約30名) ※H29年末現在
- 技術者の受け入れ研修 約170名 ※H29年末現在
- 提供した技術資料(H29年末) 約23,200件
- 受託試験等(S60年～H29年) 約60件



ウラン濃縮原型プラント
主棟(正面)と技術管理棟(右)



DOP-1(第1運転単位)の遠心分離機



DOP-2(第2運転単位)の遠心分離機